
次善の神さま

RianBrain

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次善の神さま

【Nコード】

N7197J

【作者名】

R i a n B r a i n

【あらすじ】

昨日の晩ちゃんとベッドの上で寝たのに、何故か目が覚めたら、何だかよくわからない真っ白な場所に　それも立って　いた。自称女神さまとともに。……もしや、これが噂のテンプレートというやつか、と茫然としていたら

0・プロローグ

「少年、君は知っているだろうか？」

彼女は語る。

「神の愛の……その真なる様を」

その白い 眩いまでに真っ白な空間で。

「古往今来、万人により謳われるその様が偽りであることを」

蒼穹を思わせるその……青い瞳をそらすことなく。

「……君は知っているだろうか？」

慈愛と悲哀を織り交ぜた笑みを浮かべて。

「祈るだけでは届かない。想うだけでは通じない」

祈るように、想うように手を拱こまねきながら。

「さねど、通じたところで意味のない　そんな愛があることを」

0 プロローグ（後書き）

キーワードは『軽いノリ』です。すごく憧れます。
軽快なボケとツツコミとか書けるようになっていたいなあって感じます。

1 少年と次善の神さま

その場所は、これまでの人生の中で見たどんな場所よりもきれいな場所だった。

一切の不浄がないとでも言うべきだろうか。きれいではあるが、生命いのちの在るべきところではないと感じる。

目が痛くなるほどに真っ白なその空間は、見渡す限りどこまでも広がっていた。

「……ここは？」

発した声は際限なく反響していき、真っ白な空間の中に吸い込まれていく。

一つ間違えれば、自分自身も吸い込まれてしまいそうだ。

闇を見ているわけでもないのに、この空間を見ているとそう思う。

ならばこの空間は闇なのだろう。

……決してあるはずのない白い闇。

それもすべての色を含んだ白光の白ではなく、一切を拒絶し、すべてを奪う吹雪の白……か。

……怖いな。きれいだけど、何よりも恐ろしい。

……まるでクラッシュした後のワードの白紙のよう

「あー……少年？ 現実逃避もいいが、そろそろ帰ってきてくれるとおねーさんとしても、うれしいぞ」

「しょーじき、神の愛？ 知るかボケ！ って感じである？ 私も
そう思う」

の一言から始まった一連の彼女の愚痴はこちらが口をはさむ余地も
ない一方的なもので、さらに体内時計で計測して優に一時間はぶっ
続けて続いていたように思う。

初めは、あれは私の意志じゃない。上役に強制されたんだ、とい
う話から始まって、その上役がどれだけ天然でネーミングセンスが
ないかと言うどうでもいい話につながり、仕舞いには部下の精霊が
どれだけ使えず、自分がいかに苦勞しているかと言う話に落ち着い
た。どここの中間管理職だ。

「……そろそろ改めて自己紹介と、そして今君が置かれている状況
についての説明をしたいのだが」

回想に切り込んできた、その涼やかな声に顔を向ける。

一番初めに視界に飛び込んできたのは、彼女のその青い瞳だった。
先ほどのやさぐれモードが嘘のように、その瞳は生き生きとした光
をたたえていた。なんか詐欺っぽい。

特に異論はなかったので回想をそこで切り上げ、黙って是の意だ
けを示した。

「うむ。では、まず初めに。私はさつきも言った通り、女神……君の存在する宇宙とは次元の異なる宇宙　正確には全く違うのだが、ここでは異世界と言っておこう　に存在する女神である。名はシヤリス・ソラノイタルという」

その言葉に合わせて彼女　シヤリスの瞳がきらりと光る。

神々しいまでに美しい容貌ようぼうに涼やかで自信に満ちた笑みを浮かべたその様は、確かに女神のようだった。

風もないのに、その背の、見ようによつては黄金の朝陽のように、また蒼銀クレセントの三日月のようにかがやく長く艶じややかな髪がゆらめき広がる。

「司つかかるものは天てん。森羅万象おんむじやうを顕あす十二象神じふにしょうしんの一角にして、その十二の神を統括する、全天の守護神である」

「……何かよくわからないけど、とにかくえらい神さまってことか？」

「ああ、そう思ってくれて構わない。……まあ、実際は神に偉いも何も無いんだが」

質問に答えるシヤリスの姿勢はただただ気さくだった。

神々しいのは容姿とオーラだけらしい。

まあ愚痴うちっていた時の様子とその話していた内容から中身は……だいたい予想がつくけれど。

「そして今現在、君がいるこの白い場所。ここはインテルファーゼと言う。俗に言つと、宇宙と宇宙の狭間、次元の狭間と言つやつだ。……まあ、だからと言つて別に底意地の悪い木の精霊フアフアフアとか大昔の病んだ魔導師ム・ノーみたいな凶悪な存在が封じられていたりはないが」

……何の話だよ。

やっぱり何だかちぐはぐな感じが否めない。

外見と中身がマッチしていないと言つか何というか。

「で？ その異世界の女神さまが、わざわざ次元の狭間とやらまで俺を呼び出して……何の用っすか？」

シャリスはその問いに改めてほほ笑んだ。

それにあわせて纏^{まと}う金系純白のワンピースがさらりと音を立てて波立ち、長い髪が少し左右に揺れる。

とてもいい笑みだった。惚れこんでしまいそうなほどの。

「……予想はついているのであろう？」

……だけど、今その表情にいらつときてしまうのは、きっとじようがないことのはずだ。

人間、超・現実的なことにぶち当たると苛立ちを覚えるらしい。

確かにだいたい予想はついているけど……。

こちらの心情を察したのか、シャリスはほほ笑みをそのままにして勝手に続けた。

彼女の装よそおつ金糸紺色のボレロが、どこまでも広がるその白い空間で一つだけ浮いていた。

「今から君を異次元宇宙に召喚する。これは既定事項であり、人選の変更はもはや利きかぬから、そのつもりでいてほしい」

……あー、そーですか。そーですよ。それでこそテンプレだ。

でも、やっぱりなんかむかつくんだけど、なんでだろう？

2・前説と次善の神さま（前書き）

……軽いノリ。軽いノリ。

軽いノリという言葉でノイローゼになりそうだ。うつむ。

会話の整合性。物語の方向性。情景描写と心理描写の分離。

日本語って難しい。小説って難しい。

これマスターしたら詐欺師とかになれるんだろうか。

2・前説と次善の神さま

「夢だな。……夢だといいな。……夢、だよな？」

いろいろと考えあぐねた結果、出てきた言葉はそれだった。

超・現実の事に対応しきれず、混乱して冷静さを失っていたらしい。よく考えれば、夢だと考えるのが順当な話だ。

目が覚めたら、真っ白な空間にいたなんて……。

これは夢の続き。そう、誰が何と言おうと夢の続きだ。

俺は今、まだベッドの中でレム睡眠中なんだ。

「まあ……夢だと思いたいのなら、それでも別に構わんが……」

そう言ったシャリスは、どこか投げやりだ。

さも本当にどうでもいいと言わんばかり。

そこにそこはかかない嫌なものを感じた。

だから、聞いてみる。

「……なんでですか？」

「……召喚するのは少年の精神だけだからな。身体はそちらの世界においていく。つまり」

精神のない身体？ それって

創造神の命令なのでな。あーそれと……うん、少年の運の悪さは女神として私が保証してやる」

口角が引きつる。そんな補償はいらない。

なんで、こっ、この女神はいちいち……。

なんかもう無言で抗議するくらいしか思いつかない。

状況が理解できないというか、むしろしたくない。

半眼で黙りこくってシャリスをにらむ。

「……少年も案外頑固な現実主義者だな。また現実逃避か？ このままでは話が進まんぞ？」

そのまま無言で抗議しつつ、シャリスに少しでも反撃する方法を考える。

「創造神の絶対命令は私からも謝罪する。それにこちらにいる間は最大の便宜もはかってやるぞ？」

対処方法が思いつかないから無視して無言の抗議を続ける。

「……むっ、予想外の抵抗」

まったく思いつかない。この状態はあれだ。まるで戦いのさなかに手持ちの が全滅した時のよーだ。ほら、あれ。……はめのまえが まっしろに あれ？ まっくろだっけ？ になっただやっ。

……いや、わかってる。わかってるんだ。このまま、こんなくだらないこと考えながら抵抗しても

おねげえ するだ。おらたちの むら をたすけてくんろ

はい
いいえ

そ、そんなこと いわねえで おねげえ するだ

はい
いいえ

そ、そんなこと いわねえで おねげえ するだ

はい
いいえ

そ、そんなこと いわねえで おねげえ するだ

みたいな無限ループが続くだろうってことは。この状況に陥った時点で回避不能なんだろう。

でも、このまますんなりYESと言つのは癪だ。
もうちょっと現実逃避てんじつしていい。

しばらくそのまま黙って抵抗していたら、しびれを切らしたのか
シヤリスがいきなり話題を変えた。

その間、時間にして約5分。たった5分。

「……仕方ない。これはきつと仕方ない。……まったくもって必要
はないんだが、少年がそのような態度を取るなら 他に仕様がな
いから、どうでもいいことなんだが、まずこれが夢でないというこ
とでも証明することにしよう」

そしてとても嗜虐的な笑みを浮かべ、どこからともなく一振りの
剣を取りだした。

意匠も何もない飾りっ気のないシンプルな剣だ。
ただ刃だけが尋常じゃないほど鋭い光を放っていた。

「……確か人は、物理的衝撃の有無を持って、その現実が夢か否かを判断するのであったな」

なんか発言が突然不穏になったんですけど。

……いやいや、そんな、まさか、ねえ、女神にあるまじき沸点の低さじゃないですか。

あの無言は前回長い愚痴に付き合わされた、かわいそうな俺の、ちよっとした意趣返しのもりだったのに

「……何を」

「案ずるな。峰打ちだ」

「いや待って！ 峰打ちって……それ、諸刃！ 諸刃だから！」

「遠慮するな。霊験あらたかな神剣で頭はたかれるなんて経験めつたに味わえんぞ？ 黙ってくらっておけ。……あまり神をないがしるにしているとどうなるか」

「」

がこんっ！ ……という衝撃とその音と、どちらが先だったかは

きつと今の俺の心電図の曲線は黄色を通り越して赤だと思う。
ぐりーんなはーぶがほしいぐらいだ。もう少してゾンビ化しそう。

「さて、おふざけはこれくらいにして　少年、本題に入るぞ。事前説明だ」

おふざけて……。

本当に暴力で話を強制的に進めるつもりだ、こいつ。

「今から君に行ってもらおう世界には大陸が5つある。それぞれ、キングスレフ、スレッソード、クインスラー、ロルド、ハイデイスと言う名前があるが……今のところ、ロルドを除いてそれらを君が覚える必要はないな」

頭ががんがんする。最悪だ。

「君にはまずロルド大陸に向かってもらおう。ロルドは五大陸の中ではちょうど真ん中ぐらいの大きさを持つ大陸だ。世界人口の2割弱、およそ7000万人の人がそこで生活しているから、そのつもりでいてほしい」

7000万？　微妙に少ないな。あー頭痛い。

「さて渡界上の注意だが……この世界には魔物が存在する。彼らはイレギュラーズと呼ばれる、ある種の突然変異体だ。そのすべてが自然界に存在する事物から発生する。例えば、ワニがイレギュライズすればドラゴン。人形がイレギュライズすればドール といった具合にな。心するように」

「心するようになって……具体的に？」

一瞬きよとんとした後、シャリスは言った。

「死なないように……がんばるしかないな、うん」

全く参考にならないアドバイスだった。頭痛がひどくなりそうだが、そのおかげで何となくわかってきた……ような気がする。

シャリスは確かに神なんだろう。人とはいろいろと物を見る尺度が違うらしい。

彼女が彼女なりに心を砕いて物事を進めても、普通の人間から見ると、どんぶり勘定でやっているように感じてしまう……のだろう。おそらく。たぶん。迷惑な事この上ないが。いや、もうそうであってほしい。これで確信犯なら……軽く死ねそうだ。

「がんばるって……」

啞然とする俺に何やら苦笑して、シャリスは続ける。

「まあ、実際はそこまで心配する必要はない。魔物がいるという認識さえあれば、たぶん何とかなる。向こうの世界での少年の身体は私がつくった物だし、たいていは魔法を使えばどうとでもなるしな」

魔法！？ ……なるほど異世界。さすが異世界。

そういう可能性は考えてみなかった。ファンタジーか。

未知との遭遇。経験値がっばがっば。 ……悪くないかもしれん。しかも神がつくった身体！

「つまりチート？ つくった身体に魔法の知識がインストール済みとか？」

「 ……悪いが、そんなオプションはつけてない。いたって普通の人間の体だ。魔法の習得はさほど難しいことではないから、そもそもそんなことをする必要なんてないしな。 ……まあ別に、古往今来の失われた魔法なども含めた全魔法の知識とかを付与させてもよいのだが …… その分、バランスを取るためにマイナス補正も入れなくてはならなくなるぞ」

「マイナス補正？ ……例えば？」

シャリスが顎に右手を当て、一拍考えてから答える。

「例えば……そうだな、魔法を使うとその後6時間不幸になる。連続して使った場合　つまりすでに不幸になっている状態で使用した場合だが　はじめの一回で6時間。その後、二回目からは一回使うごとに1時間延長という形になる。ただし延長は最大で48時間だから、連続44回目以降はペナルティなしで使い放題だな。ちなみに不幸のレベルは『死なない程度の不幸』だから、あまりお勧めはできませんが……つけるか？」

……どこのパーキングだ。いやパケットか？　しかも死なない程度の不幸って……

「……普通そのままをお願いします」

「わかった。……では、次に　言語に関してはこちらで調整しておいたから問題ない。一般常識もこちらもさほどかわらんから、大丈夫だろう。あとは　あー……そういえば、もしかして私は……まだ君を召喚する理由を説明してなかったりするか？」

シャリスが何故か顔をしかめて聞いてきた。

そう言えば聞いてない。現状把握に必死すぎて忘れてた。

「……聞いてないっす。……まかり間違っても魔王を倒せとか、国を経営しろとか言いませんよね？　嫌ですよ、絶対。能力的に無理ですし」

「安心しろ、そんな面倒なことは言わん。魔王なら去年倒されたばかりだから、しばらくは大丈夫だろうし。それに一年で帰すと言っているのに国を背負えなどとは言わん」

「じゃあ……？」

「うむ……君にしてほしいことと言っつのはだな……」

そこでシャリスは不自然に視線をそらした。
そして、しばらく黙りこむ。

三分ほどそのまま沈黙を保った後

シャリスはあさつての方向を向きながら、絞り出すような小声でぽつりとつぶやいた。

「……とある恋人たち（になる予定）の仲人になってほしい」

……はい？　なんて言った今、なにことぞ？

……って、結婚式に呼ばれるっていう、あれのこと？

いや、でも

「……に、なる予定？」

シャリスは視線を合わせようとしない。

「……まだ恋仲ではないゆえ、になる予定、である」

……つまり

俺に、異世界で、キューピッドになれと？

彼女いない歴〃人生のこの俺に？

異世界で、お見合いでもセッティングしろと？

わざわざ植物状態になってまでして異世界に連れてこられて、キューピッド？

そりゃ、魔王を倒せとか言われるよりはましだけど……キューピッド？

……夢だな。夢だといいな。……夢、だよな？

嗚呼、殴られた頭が痛い。

2・前説と次善の神さま（後書き）

植物状態のはなしのところで

「　　って、俺、ドナーカード持つてるんですけど!?!」

シャリスは一瞬沈黙してから、乾いた笑い声をあげた。

「……ははっ、それはもう帰ってきたら身体が亡くなってるな」

「な、亡くなって!?! いや、そんな　　」

「そこらへんはしかたない。神のすることだから、大味なのは否めない」

「いや、否めないって、あんた!?!」

というような会話を入れようとしたら、話の本筋に帰ってこれなくなっただけで削除しました。

精進が足りないようです。

3・リザード……と次善の神さま(前書き)

ぜんかいまでの すてーたす

守鷹^{かみたか} 異世界人 レベル17

耐久力(HP) : 1 / 9578 魔力容量(MP) : 0 / 768

力 : 161 魔力 : 93
すばやさ : 118 幸運 : 21
体術 : 132 魔術 : 61

シャリス・ソラノイタル 天の女神(人間擬態) レベルM
AX(100)

耐久力(HP) : 80000 / 80000 魔力容量(MP)
: 5000 / 5000
力 : MAX(1000) 魔力 : MAX(1000)
すばやさ : MAX(1000) 幸運 : MAX(1000)
体術 : MAX(1000) 魔術 : MAX(1000)

3・リザード……と次善の神さま

腕を組んで瞑目し、シャリスは語る。

「ターゲットとなる男女についてだが 男の方はラノン・ファング・フォーカスという。18歳でキャリア7年の傭兵だ。女の方はノナロスフィア・ロゼブラン、こちらも18歳。職業は……天使？ ……いや、魔女だから女神の使い魔というべきか」

ああ、女神と言っても私の事ではないぞ？ 私の母、創造神ツエーラの使い魔だ。
と、瞑目したままシャリスは続ける。

「創造神の使い魔って……なんか無駄にすごそうな気がするんですけど……」

「あーいや、そうでもない。確かに創造神の使い魔とってしまえば聞こえはいいがな。そもそも創造神自体が、おそらく少年の考えているような存在ではない。……ツエーラは世界を造りはしたが、全知全能ではないのだ。いや、むしろ、そこら辺にいるちょっと風呂敷の大きなおねーさんとも認識しておいた方がいい。……少ないともその方がそばにいる時は被害が少ない」

……なんじゃそりゃ。

また創造神しつぞうかみへの愚痴を語り始めかけたシャリスを何とか押しとどめ、とりあえず一通りの説明を終わらさせる。

話を詳しく聞いてみると、俺に求められているのはキューピッド的役割ではなく、せいぜい言ってキューピッドの助手って感じ程度のものらしい。シャリスがあの手この手で二人の仲を取り持つから、その手の神かみゆえの大味加減を、人間的視点からフォローするのが俺の役割であると。

わざわざ異世界の人間にそれを頼む理由を聞いてみたがお茶を濁されて聞きそびれた。どうもまだ何か裏があるらしい。

どうでもいいが、説明が終わってそろそろ異世界いせかいに行こうかと言うシャリスに

「あれ？そこは逝いこうかじゃないんすか？」

と聞いたら

「締める時は締める。緩める時は緩める。それができる女神というものだ」

シャリスはついて来いと言って、無造作に木々の間を歩きます。それを追いかけてながら問う。

「……リザードマン？ って、あのRPG的リザードマン？」

「うむ。正確には魔法動物門・魔竜綱まりゅうこう・人頭目じんとうもく・バイペド科・バイペド属・リザードマン。れっきとしたドラゴンの一種で、体長は2m前後が普通。独自の言語を持つが、人語で意思疎通することもできる、魔竜綱の中でも屈指くっしの頭脳を持つ連中だ」

今からそのリザードマンのいる集落に向かうと言うシャリス。聞けば、なるほど何となくゲーム世界常連のトカゲ男というのが実は思いの外、すごい存在らしいと言つのはわかる……わかるが、しかし

「……いや、魔竜綱って何？」

「……いわゆる魔物の一種族のことだ」

言ったであろう？ とだけ一拍置いて、シャリスはよどみなく歩き続ける。

その白いワンピースも薄暗い森の中でひらひらとひらめき続ける。それはまるで世界にぽっかりと空いた空白のようだった。

「こちらの宇宙には魔物がいる。それら、イレギュラーズと呼ばれるものは……多くのものが魔法突然変異イレギュラーによって生まれるが、少なからず交配によって生まれる個体も存在する。種が変化するほどの遺伝子突然変異が起こった個体は変異前の種との交配能力を失ってしまうのが普通だが、魔法突然変異においてはその限りではない。それゆえに彼らにも普通の生物と同じような種族と言う括くりが発生した。その中には過去にドラゴンと呼ばれた一連の種族がいるんだが、その中にそのまんまドラゴンと言う種も存在してな。それでは呼ぶ時に紛らわしいという話になって、後になって種族全体のことを言う場合には魔竜綱という言葉を使うことになったのだ」

わかったような、わからないような……

「世界には最もポピュラーなドラゴンの他にもリザードマンやクズリウウといった明らかにドラゴンとは形態の異なるドラゴンが存在する。それら様々な種類のドラゴンをすべてひっくるめた呼び名を魔竜綱マリュウというのだ。ちなみにドラゴンと呼ばれるドラゴンは、正確には魔法生物界・魔法動物門・魔竜綱・単頭目・ドラゴン科・ドラゴン属・ドラゴンという。……ふむ、加えて言えば現在魔竜綱では4つの目、6つの科、8つの属で16種2亜種1変種が確認されているな」

世界にとってイレギュラーな存在。それを魔物と呼ぶのだ、とシヤリスは言った。

下草がほとんど存在しないその森には苔むした岩がごろごろと転

がっていた。

舗装された道を歩くようにサクサク進むシャリスに遅れないように歩きやすい場所を探しながら、小走りで歩きつつ話を続ける。

「で？　なんで、そのリザードマンの隠れ里に行くんだ？　二人の
ターゲット
近くにはいかないのか？」

「お前と私の当座の勉強のためだ。私は確かに大陸の名前や人間に関する大まかな情報を持つてはいるが、それは神としての立場で得たものだからな。その知識は普通の人を持つものとはまったく異なる。おそらく人の中に混ざって生活する上では私のそれはまったく役に立たんだろうから、二人に接触する前にどこかで勉強しておいた方が無難であろうという話だ」

そこまで話すとシャリスが立ち止まって振り返った。

「私もはじめは一人で頑張ってみたんだが……これを見ても」

そして懐から一冊の本を取り出す。

「それは私が、人間　とくにその恋とか愛とか　について理解しようと思って手に入れた本だ。最近人間たちの間ではやりの恋愛小説というものらしい」

投げ渡された本の表紙には『ヨシユアとアレクサンドラ』ポ
ラ・スターライ著』と書いてあった。
知らない文字で書かれていたが何故だか読めるのが気持ち悪い。
これが調節したってやつかと内心思いながら本を開いた。

（ああ、アレクサンドラ！ 君はなんて美しいんだ！ まるで世界
を救うために天から舞い降りた天使。いや！ 穢れを知らない美の
女神のようだ！ その明るい栗毛に健康的な赤い頬。愛くるしく純
真な輝きはなちながら、思慮とやさしさにぬれた青い瞳！ 眉は
まるで栗色の美しい三日月のようだ。低すぎ高すぎない、慎まし
やかでかわいらしい鼻。その下にはみずみずしく、それでいてちよ
つぱり艶やかなくちびる。完璧だ！）

ヨシユアは朝日を浴びて輝く最愛の人を見てほほ笑む。

（ああ、ヨシユア！ あなたはなんてかっこいいの！ まるで古
の伝説に出てくる世界を護る英雄、いえ！ 恐れを知らない戦いの
神のよう！ その深く暗い髪に小麦色にやけた肌。子供のそのよ
うに光をあふれさせながら、慈愛とやさしさをたたえた緑の瞳！
力強い流星のような黒い眉。意志の強さを感じさせる、まっすぐで
美しい鼻。その下にあるくちびるはとても艶やかで私の心をつかん
ではなさない。完璧だわ！）

アレクサンドラはヨシユアの笑みに微笑み返した

そこまで読んで、黙って俺は本を閉じた。

これはなんか違うんじゃないか？

いやでも、俺もなあ、恋人なんていたためしがないしなあ。
うーむ、しかしこれは……

「なあ、これって……」

「……それを読み進めるとなぜか気力が失われていくのだ。まるで呪いの本だよ。私には人間の恋愛というものがわからない」

いや、わからないって……というか、これ、ただの底抜けのバカツプルの話のような気がするんだけど……

「まあ、そういう私にはわからない人間的機微かみたかというものの補佐として守鷹かみたかが呼ばれたわけだが……それでも最低限のことを私自身が

学んでおいても損はないだろうと思ったのでな。知り合いのつてをたどっているいると教授させてもらうのだ。守鷹に関して言えば、この世界になれてもらうという理由とある程度の護身術を学んでもらうという理由もある」

それだけ言うとシャリスは本を回収して再び歩き出した。

「ああ、それから何故それをリザードマンの里で学ぶのかと言うのだな。そういう心の機微のに詳しいのがそこにいるからだ。それと彼らが人間を客観的に評価できるというのもある。あと守鷹が護身術を学ぶのにちょうどいい場所でもあるとも言えるな」

それからしばらく歩き続けた後にたどり着いた森の中にぽっかりと空いたかなり大きなギャップの中にそれはあった。なんて言うか、見た目は人間の集落とそんなに変わらない。唯一はつきりと違うと言える部分は、石造りの家と木造家屋、煉瓦の家がランダムに並んでいることぐらいだ。

シャリスはあそこだと言って立ち止まることなく集落の入口に向かって歩いていく。

入口にはたくさんのリザードマンが待っていた。

ひよる長いことや横に広い奴、小さいのに腰が曲がった者。

ただそれだけだったなら普通の人間の集落と変わらないが、そのみんなが灰緑色の鱗持ちと言うのが……。

リアルで見るとちよつと怖い。

「グアルディオラ！ 来たぞ。頼んでいたものは用意できているか？」

そう言ってシャリスが話しかけたのは、その村人たちの中でもひととき大きな（横に）リザードマンだった。

「ああ、他にもないあんたの頼みだ。万全だよ」

それに応えるグアルディオラ（？）。その声は思いのほか美声だった。

見た目からは性別が判断できないが、おそらく女性だろうと思われる。

彼女の顔はどうみてもトカゲだった。
だけど、爬虫類に感じられる冷たさは微塵も感じられない。

それはその理性の光をたたえた瞳と豊かな表情、

そして本当によくしゃべるらしいその口のためだろう

3・リザード……と次善の神さま（後書き）

おかしい。

今回でチュートリアルが終わって……次で対象と接触するはずだったのに……。行きつけなかった。

必要のない魔物の設定とかを入れたからだろうか。

となると、しかたないのか。

分類って自分的にロマンが詰まっていますから。

魔竜綱には単頭目、多頭目、人頭目、角頭目があって

単頭目にはドラゴン科とフクロドラゴン科。

多頭目にはポリヘッド科。

人頭目にはバイペド科。

角頭目にはモノホーン科とトリホーン科。

そしてそれぞれの科にはドラゴン属、強ドラゴン属、フクロドラゴン属、ポリヘッド属、バイペド属、モノホーン属、アウトフィット属、トリホーン属って具合にいろいろと種類がわかる。

まあ、どう考えても無駄設定でしょうが……

今回は初心者のトカゲ穴と次善の神さまってところです。

4・グアルディオラの魔法レッスン【講義編】と次善の神さま（前書き）

ぜんかいまでの すてーたす

グアルディオラ リザードパーソンの長 レベル78

耐久力（HP） : 78643 / 78643 魔力容量（MP）

: 2431 / 2431

力 : 831 魔 力 : 539

すばやさ : 422 幸 運 : 511

体 術 : 760 魔 術 : 436

4・グアルディオラの魔法レッスン【講義編】と次善の神さま

「さてさて、お前さん。守鷹かみたかと言ったかい？ 私はグアルディオラ・レギーナ・ラケルターエ・フォレスティス・オクシデンティス・アルトリーウエラーエ アルトリーウエル西の森、リザードパーソンたちのまとめ役、グアルディオラさ。今から私があんたに魔法の基礎と軽い護身術を教えてやるよ」

グアルディオラさんは、その豊かな体格に見合う長大な両手剣ツヴァイヘンダーを地面に突き刺し杖にして仁王立ち、こちらを見ながらそう言った。纏っている雰囲気はまるで王者の風格だ。喋り口調は、食堂のおば

おねえさんだが。

それにしても名前が長い。……しかもリザードパーソンて何ですか？

「……ああ、言い忘れたが、リザードマンというのは人間が勝手につけた呼称でな。現在彼ら自身が人語で自分たちを表す際はリザードパーソンという名を用いることが多いのだ。いわゆる、ふえみはずむ、と言うやつだな」

フェミニズムって……まあいいけど。

シャリスは横からそれだけ口をはさんでから、少し離れた場所に

ある日陰に向かっていく。
グアルディオラさんの魔法レッスンに参加するつもりはないらしい。

今いる場所は村のちょうど真ん中にある広場。

といつても舗装もされていない、雑草が生えていないだけまし程度の更地だが。

入り口でのやり取り　村人総出の歓迎会だったらしい。リザードマ……パーソンたちに気を取られてかけらも話を聞いていなかったからよく分からないが　を手早く終えて、シャリスとグアルディオラさんに連れてこられたのがここだった。

「まずは魔法から。次に魔法を併用しながらの護身術を教えるから。準備を　……まだ必要ないか」

グアルディオラさんはそう言って、目を細めてこちらを見る。トカゲ顔だから地味に怖いです。

「まず簡単に魔法について教えるよ。実践はその後だ」

「はい！　よろしくお願いします！　グアルディオラさん」

私を呼ぶ時はルディオラでいいよ。
そう言つてグアルディオラさんは肩をすくめた後、本格的に話を始めた。

「さて、じゃあはじめに……そうだね。せっかくだから、ちょっと変わった切り口から話を始めてみようかね」

変わった切り口と言われても、はあとうなづくことしかできない。魔法なんてまったく知識のない未知の領域。
そもそもすべてルディオラさん任せにするしかないんすから。

「そうだね。ここにちょうど、あんたが持ちあげれそうな大きさと重さの岩があつたとする」

何やらきよろきよろと周りを見回した後、目的のものを見つけたらなかつたのか眉を少ししかめてから、そう言つてルディオラさんは何も無い地面を指さした。

「その岩を魔法を使わずに持ち上げようとする時、あんたが自然と使うものがあるね。それが何かわかるかい？」

ルディオラさんが示した地面を見ながらしばらく考え

「岩を持ち上げるときに自然と使うもの？ ……筋肉とかですか？」

と答える。

満足そうになつた後、ルディオラさんは間髪いれずに聞いてきた。

「ああ、そうだね、筋肉だ。 ……でも他にもある。何か思いつかないかい？」

思いつかないかい、と言われてもすぐには……

「他にですか？ ……道具、とかじゃないですよね？」

違うね。あくまで自力で持ち上げる場合の話さ、とルディオラさんは肩をすくめる。

「あんだ疲労困憊の状態で重たい岩を持ち上げることができるかい？」

「！ 体力ですか」

ああ、そうさ。当然過ぎて意識してなかったかい？ とルディオラさんは笑つ。

その口角があがるとともに、その中にきれいに並んだ歯　　と言っ
よりも牙だが　　が見えた。
ものすごく鋭そうだ。

「……それと答えはもう一つあるよ。他に思いつかないかい？」

「……そうっすね」

しばらく考えた。けど、やっぱり何も思いつかない。
するとルディオラさんが軽く首を振って話を先に進める。

「ふむ、これは仕方ないかね。……最後の一つは体術さ」

「体術？」

「ああ、まあ体術というか、正確には身体の動かし方の知識ってと
ころだけだね。岩を持ち上げるときに息を止めているか、いないか。
力を入れる前に息を吸うのか、吐くのか、そういう類の知識さ。も
ちろんそれだけでもないけどね」

ふむふむとうなづく俺に、ルディオラさんは続ける。

「岩を持ち上げるといふ行為に最低限必要なものは、今言った体力、筋肉、体術の3つ。これと同じように魔法を使うにも最低限必要なものが3つある。それが魔力容量、魔力、魔術だ」

ルディオラさんが自分の言葉に合わせながら、手の指を三本立てた。

やっと本題に入るらしい。指を一本折って話し始める。

「まず魔法の体力に当たるもの、これを魔力容量と言う。これの説明がまた面倒くさいんだけど……シャリスの話じゃ、異世界にも概念としては存在していて『えむぴー』って言うらしい。知ってるかい？」

MPですか。そうですか。

「……知ってます」

「じゃ、説明はいらないね。楽で結構！ さくさく先に進もう！

さて、お次は筋肉に当たるものだ。これは魔力マジック・コンダクティビティって言う。正確には魔力伝導性のことなんだけど……これは言うなれば魔力の扱いやすさを表すものさ」

二本目の指を折るルディオラさん。

「魔力の扱いやすさ、ですか？」

「魔力と言うのは概念上の存在でしかないからね。詰まりはエネルギーの一種だから、光エネルギーや熱エネルギー、化学エネルギーと同じなんだ。あえてそれ風に呼ぶなら魔法エネルギーとでもいうかいね。それを人は外界から自分の身の内に取り込んで魔力容量として体の中にストックする。そして魔法を使う時に体の中からそれを取り出して使うってのが魔法の基本的なからくりなんだ。その取り込む、取り出すという行為、その効率を魔力伝導性、略して魔力と言うのさ」

ルディオラさん、見た感じではパワーファイターなのに理論派なのか？

「まあ簡単に一言で言ってしまうえば、体の魔力への慣れて事になるかいね。魔法を使えば使うほど、それは高まり、そしてこれが高ければ高いほど、魔法の展開が速くなり、その威力が高まるのさ」

さて、次、最後に、と前置きしてルディオラさんは3本目の指を折る。

「そして最後に、体術に当たるもの。それが魔術だ。正確には魔法技術の略だがね。これは言葉通り魔法に関する知識と技術のことさ。知らない魔法は使えないって話だね」

話が長くなるからと言って、その場に座らされる。

「何を置いても、まず知っておかなければならないのは、すべての魔法の基礎、根源が『召喚』であるということだね。魔力　魔法エネルギーを用いて、そこに存在するはずのないものを召し出し、顕現させること。それが魔法の本質さ。古くはシャーマニズム、神降しから始まり、現在まで連綿と続く魔法の歴史の中で、それだけは絶対に変わらない」

ルディオラさんは地面に突き刺していたツヴァイヘンダーを引き抜くと、その切っ先で地面に大きな円を描く。

「魔法エネルギーと言うのは、言うまでもなくこの世界の一部でね。まあ、それゆえに召喚の顕現媒体になるわけだけど　魔法使いの技量次第では、この世界にあるものなら何にでも変換できるって性質を持つてるんだ。だが、世界というのは我々に比べてあまりにも大きいだろ？　だから、たいていの人間は世界全体を意識して魔法を行使すると、そのあまりの情報の多さに逆に変換の方向性を見失い失敗してしまう。そこで考えられたのが世界を分割して理解することさ。わかるということは分けるということってやつだね。そちらの言葉では『属性』とか『系統』と言うんだっただかいね？」

そう言って、ルディオラさんは地面に書いた円を切っ先で四分割する。

「この世界にはまず大きく、四大という系統があるのさ」

「四大？ って、火土水風のあれですか？」

「違うね。乾、神、坤、命で四大だ。……異世界では火土水風が四大なのかい？」

「ええ、まあ。そうですね。2000年以上昔の人が言い出した空想上の産物ですけど。……それで乾神坤命って言うのは？」

ルディオラさんは円を分割してできた四つの扇の中に、四つのひし形でできた星芒型の象徴、一つの稲妻形の象徴、同じ大きさの四つの円を密着させたような形の象徴、三つ巴の紋のような象徴を一つずつ書きいれていく。

「乾というのは大空のこと。坤というのは大地のこと。神というのは大空と大地をつなぐもの。命はそのまま生命のことさ。そして四大それぞれは……乾ならば天、日、月、星の四象。神ならば雷の象。坤ならば火、風、土、水の四象。命ならば木、獣、人の三象にさらに分けられる。これらをすべてあわせた乾神坤命四大十二象が現在一番よく用いられる世界の分割認識の法だね」

十二象？ はて、どこかで聞いたことがあるような……。

十二象……十二象……十二象神！ 天の女神シャリス・ソラノイタル！

「あーと、それって……シャリスとなんか関係あったりします?」

その言葉に反応してルディオラさんは片眉をあげる。

「そりゃそうさ。そもそもこの分類認識は魔法が一般化してから千年ほどの紆余曲折を経て、最終的に古くから存在して多くの人に知られている十二象神の神話になぞらえて考えだされたものだからね」

「……十二象神って?」

「本格的に話し始めると長くなるから簡単に説明するとだね。十二象神というのは創造神カオス・コスモス《混沌秩序》、別の名をサ・セーラまたはツエーラと言うんだけど によって生み出された、世界の構成を維持するための十二柱の神々さ。太陽神ミクニサス、月の女神アマエラ、星神シンティーシュ、雷神トウグナル、炎神キハラエ、風神アメト、土の女神ティエラ、水の女神ミナーリア、木神ヤアレ、獣の双神トワ・ローメワ、人の夫婦神オルティス・メルティエール、そして…天の女神ソラノイタル。彼らをもって十二の象かたちを司る神々 十二象神と呼ぶって話だよ」

ルディオラさんはちなみに、と言って、さらに話を続ける。

「《混沌秩序》と十二象神の間には四大神つてのもいてね。わかると思うけど彼女らはそれぞれ乾神坤命を司るんだ。乾の大神シャリス、神の大神リンカ、坤の大神アーウヤシヌ、命の大神メイツイオ

「ネってね。その中でも乾と神の大神はそれぞれ十二象の中の天と雷を司る神位を兼任していてね。それで神の中でも例外的にシャリス・ソラノイタル、リンカ・トウグナルみたいな名で呼ばれる。シャリスのあの名は両方名前で姓はないんだよ」

そう言っつてルディオラさんはシャリスの方を見た。

シャリスは日陰で眉間にしわを寄せながら本を読んでいる。

……例のあの本の続きか？

「少し話がそれたね。話を元に戻すよ」

シャリスの読んでいる本の中身が気になったが……意識をルディオラさんに戻す。

「その十二象の系統つてのは、得意不得意が生物種によつてわかれらつて性質があるんだよ。普通の人間が得意なのは神の魔法『雷』、坤の魔法『火風土水』、そして命の魔法『人』つてところだね。これは人間が大地に生きる生命だからだろうね。『人』の魔法は言わずもがな。『雷』の魔法は大地に落ちてくるといつつながりがあるしね。他の系統は……よほどの才能か、それぞれの十二象神の加護がないと難しいって話を聞くね。……あんなの場合はシャリスの加護があるみたいだし、修行次第によつては乾の魔法『天日月星』とかも使えるようになるだろうね」

説明はこれぐらいにしておいて、そろそろ実践に移ってみようかとルディオラさんは言う。

「まずは身近な坤の魔法 『火』の初級魔法からいってみようか」

立ち上がってズボンについた土をはたき落とす。
そして見知らぬ服を着ていることに気がついた。

昨晚寝た時はちゃんと寝巻ハジャマだったのに……。

何故か、『ぬののふく』っぱいものと『かわのくつ』っぱいものを……装備している。

これは……

武器……
頭部防具……
腕部防具……
胴部防具：ぬののふく
脚部防具：かわのくつ
装飾品1：チタンフレーム・メガネ
装飾品2：……

ってやつか？ ……いやいや、ぬののふくは防具じゃないだろう。
シヤリス……用意するならもつとましなものをくれればいいのに……。

それに比べてディオラさんは……

武器：ツヴァイヘンダー

頭部防具：じまえのあたま

腕部防具：じまえのじょうわんにとうきん + ぐついでいガントレ

ツト

胸部防具：じまえのきょうきん + かたそうなよろい

脚部防具：じまえのだいたいきん + こうてつせいっぽいグリ

ーブ

装飾品1：たかそうなマント

装飾品2：みんぞくこうげいひんっぽいみみかざり

……めっちゃ強そうですねですけど。

「何ぼさつとしてんだい！ こっからが本番なんだ。 氣い抜いてると自分の炎で丸こげになるよ」

その声に我に返ってルディオラさんの顔を見る。

……なんだかいつか愚図は嫌いだよ、とか言われそうな気がするの
は気のせいだろうか。

4・グアルディオラの魔法レッスン【講義編】と次善の神さま（後書き）

思いのほか長くなったので、2回に分けます。

……軽いノリで無駄設定をつっこむからだろうか。予定通りに行かない。

ちなみにですが、グアルディオラの名前はグアルディオラだけです。その後のレギーナ・は名前じゃありません。あれです。レオナルド・ダ・ヴィンチがヴィンチ村のレオナルドさんっていう意味なのと同じ感じですよ。ですから、あれはアルトリーウェル西の森のトカゲの女王グアルディオラと名乗っているわけです。……これも無駄設定の一つ。

5 ヴァルディオラの魔法レッスン【実践編】と次善の神さま（前書き）

だいぶ前に感想をいただいたのに反応もせず、申し訳ない。

評価して下さったり、お気に入りに入れて下さったり、感想をくださったりした方、この場を借りて御礼申し上げます。

5・グアルディオラの魔法レッスン【実践編】と次善の神さま

「魔法の使用に体内の魔力容量から魔法エネルギーを取り出して作用させるという制限がある以上、その展開場所がどうしても体表面上に限られるってのはわかるかい？」

再びツヴァイヘンダーを杖に仁王立つルディオラさんは語る。

「前にも言った通り、魔法エネルギーってのは世界中に遍在する。だけど、それはそのままでは魔法には利用できなくて、一度体内に取り込むってことをしなくちゃならない」

何故かは知らないけどね、とルディオラさんは肩をすくめた。

「この体内に取り込んだ後の、魔法に利用できる魔力のことを専門的には変性魔法エネルギー *denatured magic Energy*、D魔法エネルギーって言うんだけど……これは非常に もともとと同じものなんだから当たり前前の話だけど 元の魔法エネルギーとの互換性が高いんだ。つまり体内から取り出した際にあまり体表から離れさせると、大気中に存在する他の魔法エネルギーと混ざって、すぐに元の魔法エネルギーに戻ってしまうっていう性質を持つのがさ」

そこで息が切れたのか一呼吸置いてから、だから、とルディオラさんは続けた。

「だから、それを防ぐために基本的に魔法ってのは体表面上一番イメージしやすいのは手のひらだね。理論上は手の甲でも、足の裏でも、角膜でも、どこでもできるけど　で展開、そしてそれを放つ、撃ち出すというのが基本スタイルになるわけさ。ってことで　」

晴天の下、突然垂直に掲げられたルディオラさんの手の先に、炎の渦が巻き起こる。

それは手のひらの上で回転することに小さく圧縮されていき、すぐに硬球ほどの小さな火球となった。

「んじゃ、行くよ！　よく見ときな。これが火の初級魔法　F
フレイム
I a m eだ！」

そう言って振り下ろされた彼女の手のひらからそれは虚空へと撃ち出された。

火球は土埃を巻きたてながらまっすぐ飛んでいく。かなりの速度で飛んでいるのにも関わらずその炎はわずかにもぶれることなく、球体をきれいに維持したままだった。そして瞬く間に広場を飛び出したそれは、轟音とともに一番近くの煉瓦造りの家の壁にぶつかった。その瞬間、圧縮されていた火勢が開放されて、大きく膨れあがりはじけ飛ぶ。

突然の衝撃に腰を抜かした家主がわたたと家から出てくるのを傍観しながら、ルディオラさんは言った。

「……うん、こんな感じだね。次、お前さんがやってみな」

「いや、やってみなと言われましても……」

結局、魔法の使い方自体の説明はなしですか？

それと誰だか知らない人の家の壁がもの見事に崩れ落ちてますけど……いいんですか？

視界の端に映る、自宅の壁の惨状を知ったのか鱗を真っ白にして

燃え尽きている家主。

これも火の魔法の効果だったりするんだろうか？　と試してみたり。

結論から言えば、もちろん、それが魔法の効果なんかであるわけでもない。

そして本題の魔法の使い方については……魔法自体の説明は簡単にできるけど、使い方自体の説明はできない、というのがどうやら普通のことであるらしい。ルディオラさんいわく、魔力容量はそもそも生物に自然と存在する器官のようなものであり、それを使う説明などできるわけがない、と。筋肉の構造やどういうメカニズムでそれが働くのかを説明できても、あまりに当然として使っているために筋肉の動かし方自体を説明することはできないのと同じらしい。

それでもあえて使い方を説明する言葉を探せば……感覚？　になる、と。

なんて言うか、全くできる気がしない。

途中で、別のアプローチ

「火つてのが燃焼反応の副産物だってことは知ってるかい？　そもそも燃焼反応つてのは物が燃えるっていう化学反応のことだけど…：化学反応つてのは物質が分子・原子レベルで結合、あるいは分解されて新しい物質に組み換えられるっていう現象だから、燃焼^{それ}反応は簡単に言えば、ある物質が酸素と反応して分解され、水と二酸化炭素とプラスアルファという、より安定している物質に組み替えられる反応つてことになる。そして、その組み替えられる際、物質が安定化したために出てくる余剰な結合エネルギー　化学エネルギーが光エネルギーと熱エネルギーに変換されたもの、それが火と呼ばれる副産物^{もの}さ。…：そうだね。物質つてものが分子の集合体であるつてことは知ってるだろう？　そもそも物質にはエネルギー状態が低いほど安定になるという性質があるけど、逆にエネルギーが全くなければはじめから存在できないという性質も持っている。それは分子の集合体をつくる時に分子同士をひっつけさせるための『のり』　いわゆる化学エネルギーが　（中略）　つまり、その余った『のり』が光エネルギーと熱エネルギーに変換されたもの、それが火の正体つてわけさ。だからD魔法エネルギーをその二種類のエネルギーに変換するつてのが、火の魔法の基本つてことになる。わかったかい？」

という魔法というよりもむしろもう化学だろみたいなアプローチも試してみたが駄目だった。

他にも……

「メ、メ ミ、メ ゴーマ、カ ザーフェニックス！ 天 魔闘
！ 灰になれ！」

いわゆるイメージ戦法。

本来は魔法に呪文など必要ないが、自分が一番火をイメージできる
言葉を詠唱して発動の補助にするというのも試してみたが

「フ イア、フ イラ、フ イガ、メ トン！ いつ みーまーり
お！」

まるで駄目。

叫びは広場にむなしく広がり、あいつ何してんのかみたいな目でリザ
ードな人たちに見られただけだった。

「火遁、豪 球の術！ マ ラギ！ ジ ポーライター！ マズル
フラッシュ！ チ ッカマーン！」

……むしろ軽く心が折れた。

「ああ、シャリス。すまないね、中々うまくいかなくて……せつかくのあんたの頼みなのに」

自分の中の違和感に首をひねっていると、ルディオラさんが軽く肩を落としてそう言っていた。

シャリスが苦笑しながら、ルディオラさんの肩に手が届かなかったのだろう。上腕をたたく。

「いや、かまわんさ。これはある程度予想していたからな。生まれながら17年間も魔法を使ってなかったんだ。大方、魔力容量が錆びついているのだろう」

筋肉だって数日使わないだけで萎縮し始めるだろう？

そう言っただけでシャリスはこちらに視線を向けてきた。

「同じようなことが魔力容量に起こったとしても不思議はないと私は思う。ましてや今回は期間が17年なんだ。それは頑固に萎縮していることだろう。とは言え、その萎縮は筋肉に起こるような物理的なものではなく、精神的なものであろうかな」

「精神的な萎縮？」

違和感をとりあえず置いておいて問う俺に、シャリスがうなずく。

「そうだ。……まあ簡単言ってしまうえば、それは常識ということになると思う。魔法なぞあるわけがないという、な。厄介なことだが、おそらく幼いころから蓄積された無意識下での刷り込みでもあるのだろっ」

「ふむ。確かにそれなら使えなくても不思議じゃない。でも、それじゃあ……なんでだい？」

そこまでわかっついていて何故わざわざ遠回りでもするかのようにわざわざ自分に頼むのか、とルディオラさんは問う。

「あくまでもそういう可能性がある、というだけだったからな。一応対策は考えてあるができれば使いたくない、というのが本音なのだ。グアルディオラに教わっているうちに自然と解消されるなら、それが一番だと思ったのだよ。……私の考えた方法は危険だからな」

最後に聞き捨てならない言葉がさらっとなつた。
「ただ、文句の言葉が口から出ない。何これ？ 恐怖？ 恭順？」

自分の変調に顔をしかめていると代わりにルディオラさんが話を続けてくれた。

「危険？ どんな方法だい？」

「異次元宇宙の常識が足かせとなるならば、それを超えるこちらの常識をそれに上書きすればいい。ま、要するに魔法という存在を少年の身体に叩き込むんだ。……無意識下の常識すらも塗り替えられるほど……嫌というほどな」

「……叩き込むって」

もしかしなくても……教えるって意味じゃなくて、物理的に当てるってことか？

「……確かに危険だね。そんなことして大丈夫なのかい？」

「死ぬとか死なないとかという問題なら、大丈夫だ。少年の体はこの世界に召喚するために私が特別に用意した入れ物だからな。最近のはやりで言えば……あばーと言ったか？ 私が死んでも変わりがあるかもしれないものというやつだな。だから、少しくらい欠けても、まったく問題ない。すぐに直せる。最悪全損したとしても、少年の魂はインテルファーゼに飛ばされて、新しい入れ物に定着。いわゆるデスル。ラだな。するから、手加減する必要もないな」

「知らない間に勇者体質か、おい!？」

「勇者体質？ まあそうとも言っただが、これならあれだ。護身術も一緒に学ぶことができて一石二鳥だぞ？ お得な感じがいつぱいじゃないか」

「絶対、それによって払われる犠牲は勘定に入っていないだろ!？」

「無論だ。犠牲になるのは少年であって、私ではないからな。どうだろう？　グアルディオラ。やってみないか？」

シャリスは俺の言葉を軽く流してルディオラさんに話を振った。

「あんたが大丈夫だってんなら、私はそれでも構わないけどね……」

そう言っおもんばてルディオラさんは慮おもんばるかようにこちらをちらりと見てくる。

その微妙な優しさが身にしみた。

「じゃあ、大丈夫だな。守鷹！　軽く体をほぐしておけ。すぐに始めろぞ」

俺の意思は不在ですか、と思う。

しかし、思うだけ。反対することができなかった。何故か。

「……わかった」

チュートリアル バトル

クリア条件：魔法を覚える

制限 時間：

フィールド：集落外縁及びその周林

広場から村の外へと移動して訓練を始める。

「ルールは簡単だ。今から少年を狙って魔法を使うから、少年はただそれから逃げ続けなければならない。それを続けていればそのうち危険を感じた本能が目覚めて魔法も使えるようになるだろう」

なんかえらいてきとーな気がするんだけど、気のせいかな？

「じゃあ、準備はいいかい？ 始めるよ」

そう言っつてルディオラさんは身構えた。

まず飛んできたのはさつきと同じ火の玉 フレームって言った
か？ それが6つ。

しかし、高速で飛んでくるにしても所詮その軌道はまっすぐだ。
だから、それなりに距離があいていれば簡単に避けられる

……はずだった。

「ほぐわっつ!?!」

6つの火の玉をよけきつたと思った瞬間に、みぞうちに軽い衝撃が走る。

それほど威力はなかったけど、こふつと肺から空気が抜け出て、息が乱れた。

何とか呼吸を整えて顔だけあげてみれば、ルディオラさんが目を丸くしてこちらを見ている。

そして、彼女はシャリスの方へ振り返った。

「シャリス?」

「誰も私が参加しないなんて言っていないだろう? グアルディオラ」

シャリスは眉ひとつ動かすことなく、こちらをまっすぐ見たままそう言った。

「そして、守鷹。何が起こったのかわかっていないようだから説明するが、今は火の魔法の中に不可視の風の魔法を混ぜ込んだんだ。次からはもつと本気で逃げろ。避けるんじゃない。逃げろ。言っただろう? 常識をたたき壊すんだ。生半可なことではどうにもならん。身構えて避けるなんて甘いことをするな。次からはかまいたち

を混ぜるかもしれない。気づいたら腕が飛んでたとかいうことになりかねないから注意しろ」

本気だ。この人。

目が本気の色をしている。

「……仕方ないね。カミタカ、いつちよ覚悟を決めな！」

「……りょーかい」

火に土に水に風、こちらに向かって飛んでくる魔法から逃げる。

背を向けて走ればすぐ近くの森にでも隠れられるのだろうけれど、飛んでくる魔法がそれを許さない。そもそも飛んでくる量も半端ないし、撃ち出される頻度もえげつない。回避するのに必死で、魔法を撃ち出す二人の姿を確認することすらできない。仕方ないので、ルディオラさんたちの周りを大きく円を描きながら回って少しずつ距離を取っていくことにする。おかげで気分はもう地球の引力から逃れたい月そのものだ。

時々魔法が身体をかすめるが、そこら辺は手加減してくれているらしく、そこまでひどい怪我にはならない。

しかし時々飛んでくる雷。

ちよつと強烈な静電気程度の威力ではあるけれども、光と同じような速度で飛んでくるものをどうやって避けると？ 絶対シヤリスだ

る、これ撃ってるの。

「あだっ!？」

バチツという音とともに刺さるような痛さを感じて倒れこむ。どうやらまた雷の魔法に当たったらしい。

「立ち止まるな。火だるまになるぞ」

その言葉とともに飛んでくる火の玉を前回り受身の要領で

「要領と言うか、お前のそれはただの前転だろうか？」

「人のモノローグに文句付けんな！」

だが、あえて内容は否定はしない。

別に自分でもそうかなあって思ったわけじゃない。

同じだと思うからだ。

前転も、前回り受身も。そんな変わらないって。

「……いや、全然違うと思うよ。カミタカ」

何故かルディオラさんにも思考を読まれた。

……シャリスは曲がりなりにも女神だし、あるかなとは思っていたけど。何故？

「阿呆、考えている暇があったら身体を動かせ」

飛んできた水の塊をすんでのところで避ける。

背中に水しぶきを感じながら、二人の方を見れば、ちょうど次の魔法を放つタイミングだった。その両手の10本の指から。

「どこのフ　ンガー・フレア・ボムズ!？」

後ずさりながらできるだけ距離を取り、計20個の魔法、火やら風やら土やら水やらを一つずつ避けていく。しかし今度は油断しない。できるだけ二人から目を離さない。

案の定、前の魔法を消化しきる前に、二人は次の魔法を撃ち出そうとしていた。

まずルディオラさんがその両手から10発放つ。次にわざとタイミングをずらしてシャリスが撃ち出してきた。

まっすぐ飛んでくる10の魔法をさばききる。

範囲外に逃げるだけの暇はないので、そのままの場所でシャリスの魔法から逃れようと小さくサイドステップした

「なっ!？」

途端、その魔法が軌道を曲げた。バックステップをする暇もなく、背骨が折れんばかりにのけぞるようにして避ける。

「誰も魔法の軌道を曲げられんなどとは言ってないぞ、少年」

いきなりくねくねと曲がり始めた魔法を体勢も何も度外視して必死に避けるが

「いっつ!？」

5、6発避けた時点で背中に火の玉がぶち当たられ、その爆発で吹き飛ばされる。

しかも何メートルか転がった後、連撃の水の塊で強制的に消火され、そして駄目押しに感電させられた。

いくら威力を抑えているといっても痛い。

一回被弾すると立て続けにダメージをくらうのも痛い。

「た、タイム! ちょっと、無理」

「現実にポーズはなしだぞ、少年」

そう言って無情にもシャリスは次の魔法を撃ち出した。

「……シャリス、あんたも大概ストレスがたまってるみたいだね」

呆れたようにルディオラさんがつぶやくのが聞こえる。

「ルディオラさん！ そんなこと言っていないで止めて！ 止めてください！ その駄女神を」

「案ずるな。ちゃんと向こうインテルファースに着いたら、あの言葉を言ってやるから」

その時、極限状態の脳裏に何故か小さなシャリスが現れた。そしてそいつはにんまりとした笑顔で俺に告げる。

おお、かみたかよ！ しんでしまうとは ふがないい……

その言葉を聞いた瞬間、俺は

て逃げ出した。
頭の上をこちらをねらっていた魔法たちが通過するのを感じる。

「匍匐前進の要領というか、匍匐前進そのものではないか」

「だから！ 人のモノローグに文句付けんな！ いきなりマリックスみたいな曲芸避けができるかってーの！」

ルディオラさんの苦笑が聞こえる。

「まあ判断は悪くないけどね。……でも、土の魔法の存在を忘れてないかい？」

その言葉とともに大地が震えだす。

そのあまりの激しさに身動きが取れない。

この局所地震。震源地はルディオラさんの足もと　魔法だった。

「ちよっ！？　今、魔法使えたよね？　条件クリアしたよね？　なんで」

「こっからは護身術の訓練さ」

何だか語尾に星が飛んだ気がするのはい気のせいだろうか。

地震が収まると同時に火の玉が、水球が、土くれが雨あられのごと

く飛んでくる。

「マジですか!?!」

すぐに立ち上がって、頭を抱えて森へと全力疾走する。

「お前に闘いの技法なぞ望んではない。満足に剣も握ったことないような奴にそんなこと望むべくもないだろう? 刃物なんぞ持たせようなら逆に危険だということぐらい誰にでもわかる。私がお前に望むのは、有事の際に逃げ出せるということ、ただそれだけだ。相手の攻撃を避けて避けて避けまくり、そしてその場から逃走する。それさえ出来ればそれでいい」

「護身術ってそういう護身術かよ!?!」

「そーいう護身術だ、というか、この場合は遁甲術というべきか? よかったな。ある意味、忍術だ」

「Burn ふざけんな Flame!」

思わず入れたツツコミに何故か火の魔法が追加発動した。

それはまっすぐシャリスの方へと飛んでいき、そしてシャリスにあたる寸前がかき消える。

「魔法をツツコミで使えるようになるなんて中々の進歩状況じゃな

いか。しかも豪球の術。……くくく」

む、むかつく。

「ぼさつとしてんじゃないよ！ 死にたいのかい！」

ルディオラさんの警鐘に火の玉が飛んでくる。

それをあわてて避けながら、森の中に駆け込んだ。

「死ぬ。軽く死ぬる」

その後、戦いの舞台は森の中に移り、そこでシャリスとルディオラさんに追いかけまわされた。

いくら魔法が使えると言っても、所詮はサバイバルゲームすらやったことのない素人。何度死ぬような目にあつたことか。それでも、なんだか色々な意味でずたぼろになりながらも、二人から逃げ切り、集落の前まで戻ってきた時には日が暮れていた。そこでチュートリ

……え？

まだ続くんですか？ この授業。

5・グアルディオラの魔法レッスン【実践編】と次善の神さま（後書き）

続きます。

と言つても次は短いはず。

そして次で説明も終わるはず。

次の次でターゲットも出てくるはず。

ま、所詮、予定は未定ですけどね……。

この小説にはプロットなどと言う上等なものはありませんので、その場で方向性が決まります。（さすがにキューピッドのくだりは初めから決まっていたましたが、あとどういうオチになるかも）ですから更新も遅く、いろいろと迷走するはずですが、どうぞよろしくお願いいたします。

6・起点と次善の神さま(前書き)

前回までのすてーたす

守鷹 異世界人 レベル20

耐久力(HP) : 11449 / 11449 魔力容量(MP)

: 868 / 868

力 : 181 魔 力 : 107

すばやさ : 140 幸 運 : 22

体 術 : 161 魔 術 : 81

6・起点と次善の神さま

あのあと、村の中に戻った俺たちは村長　ルディオラさんの家で軽い夕食を取った後、深夜になるまでこちら辺の地誌についてのレクチャーを受けた。授業の様子は……まあ特筆することもなかったので、割愛させていただきたい。ちなみにシヤリスは食後から別行動を取った。たぶん、人間の心に詳しいという人のところにも行ったのだろう。

そしてこちらのレクチャーの結果得られた知識だが……

ロルド大陸は『^{ひし}菱形』の上の頂点に傾いた『長方形』が接して、全体として裂け目のはいつた『く』の字の形をしているように見える大陸である。

その北側の傾いた『長方形』の地域を北ロルド亜大陸、南側に位置する『菱形』の地域を南ロルド亜大陸といい、その二つの亜大陸の接する地域をロルド大陸陸橋と言う。

現在地は北ロルド亜大陸の南部の高山地帯の、その中でも口

ルド大陸陸橋にもほど近いアルトリーウエルという高原の、さらにその西の最果ての森である。

アルトリーウエル高原は、険しい山が多い北ロルド亜大陸の南部高山地帯の中で、人間が住んでいる唯一の地域であり、さらに南ロルド亜大陸からの旅人が大陸陸橋を超えて北ロルド亜大陸を進もうと思う時に、必ず通らなければならない交通の要所でもある。

そんな場所に国ができないわけもなく、リーウエル王国と言う人間の国がアルトリーウエル高原の中央部に存在……したらしい。九年前まで。王国の主流を占めてはいたが、もともと不仲だった西の民『リーウエスタ』と東の民『ルイス』の両部族のいさかいが原因で国が真っ二つに割れて争い合い、その結果九年前に王家が消滅して国が滅びたらしい。現在こそ小康状態になってはあるが、今に至るまでずっと紛争状態のままである。

現在の暦は亡国暦9年、もしくはフォゼーヌ『岩の大樹』国
国暦、略して大樹暦1463年である。亡国暦は主にアルトリーウ
エル高原で使われる暦で、他国ではその国の暦 例えばほりやら
ら王国だれそれ王在位何年みたいなやつ が使われる。そして各
国での共通の暦として、大樹暦が使われている。それゆえに大樹暦
は多国間を渡り歩く商人や傭兵などによく使われる傾向があるよう
だ。ちなみにフォゼーヌ『岩の大樹』国と言うのは別名、始まりの
国とも人間の生まれた場所とも呼ばれる1400年ほど前に実在し
た国であり、ロルド大陸の東に存在するレギオン世界、女神的シャリスに言
えばキングスレフ大陸の、フォゼーヌと言う地に生えた『岩の大樹』
と呼ばれる巨木のふもとに築かれた伝説の国であるらしい。

北ロルド亜大陸の南部にはさつきも言った通り、高山地帯が存在しているが、その高山地帯の北には針葉樹林の大森林地帯が、さらにその北には凍土帯フンドラが広がっている。人が住んでいるのは主にその大森林地帯であり、そこでは最も大きなノスマルーク王家を中心とする大小多数の諸侯が各地に封じられ、中世封建に似た社会が展開されているようだ。ちなみにノスマルーク王国の最南端領にあたるルーイガー選王辺境伯領は旧ルーエル国領に接しているらしい。

高山地帯の東はカーリエ王家を中心とした諸侯が存在している。カーリエ王国はその規模からも文化的側面からもノスマルーク王国に一步及ばない国で、王家自体に領土的野心はないもののお抱えの諸侯たちの中にはそれを強く持つ者もいるとかいないとか。ルーエル王国の騒乱の原因となった二つの部族のいさかきも、この国のルーエルカーリエ境界領領主の暗躍があつたのだという噂さが流れているらしい。

南のロルド大陸陸橋のあたりは延々と草原が広がる地域で遊牧民たちの国がある。名前は『草原の獣』国。国の名前にけものなっていてはいるが、別に獣人の国だったりするわけではないらしい。草原全域に生息するソウゲンオオカミにあやかっつて遊牧民たちが付けただけの話らしい。さらに南に進んで南ロルド亜大陸に入るとすぐ大砂漠グレートデザートという名の無人の砂漠が広がっている。その砂漠を越えると再び人の住む地域に入るが、そのあたりはサウル帝国という国が支配しているらしい。しかし砂漠の存在のためか、帝国の交易が海を渡つた南のハイデイス大陸のロクタール王国に集中しているた

めか、あまり詳しい情報は入ってこない。

この大陸全体の文化レベルの平均は中世から近代の間ぐらい。ただ魔法があつたり魔物イレギュラズがいたりするためか、妙なところで高かったり、低かったりするみたい。お金の単位は重さの単位と同じでミトといい、1ミトの金はおよそ70ミトの銀に等しく、1ミトの銀は1000ミトの銅に等しい。いわゆる計量貨幣的な使い方をして、およそ80ミトの銅で一食に飲み物が付く程度の価値があるらしい。

異世界と言うだけあつて魔法使いはさほど特別なものではないらしい。ただ誰もが魔法を使える中で、わざわざ魔法使いと呼ばれるような人たちであるから、こちらの世界で言うプロスポーツ選手かその道の専門家みたいなものとして認識すればよいらしい。

ちなみに寒冷な北ロルド亜大陸で需要の大きい交易品は帝国の酒や遊牧民の羊毛で、商業で一山当てようと思う人間はこぞつて南に向かうらしい。が、途中の草原狼コヨーテが棲む『草原の獣』国やそれを超えた後の大砂漠を通過するのは至難の業らしく、成功率は高くない。定期的に交易をおこなう商人はそれまでの知識とその財を用いた豊富な人材によって、それらを突破しているらしい。なので、傭兵の需要は戦争や常備軍としてのそれと同じか、それ以上に商人によるものが多いようだ。

と、こんな感じになる。

寝起きでぼーっとする頭を振りつつ、身体をベッドから起こす。

「……夢オチだったら楽だったのに」

あくびをしながら固まった全身の筋をほぐしつつ部屋を見回す。床は明るいのに部屋全体は薄暗かった。太陽の高度が低く曙光が鋭い角度で部屋の中に入り込んでいるからだろう。

その光を取りこんでいる客間に唯一の窓へ向かう。

格子にはめられたガラスは向こうの世界と物と同じぐらい質のよさそうなものだ。まあ見た目だけの話で、強度までそうかどうかは分からないけれど。

窓から見える景色は普通　ではなく、木造に石造り、煉瓦造に……あれは鉄筋コンクリート？　な建物がごったになって並んでいる、なんとも奇妙な町だ。

それを見れば、自然と思う。

「……異世界？　なるほど常識は通用しないってか」

考えるべきことはたくさんあった。

統一性のない建物たちの間に見える昨日の広場に目を向けて、昨日の魔法の特訓とシャリスの言っていたことを思い出す。

一晩経って冷静になって考えれば、シャリスの言っていたことは正しいのだろうということがわかる。特にMelodyメロディというらしい回復魔法の存在を知った後、実際にその力の恩恵を受けた後では回復魔法と言うのは『命』の魔法に含まれるらしい。それは文字通り、怪我を回復させる魔法だ。即死級の致命傷でもない限り、魔力容量がもちさえすれば、どんな怪我でも瞬く間に治すことができる。治すことができてしまう。だから、おそらく……この世界に怪我人と言う概念はきつとない。この世界の戦いに負傷者は一人もない。殺しつくされるか、生き延びてすぐに戦場に舞い戻るか、その二つしか存在しえない、この世界の戦いはもといた世界の戦いよりももっと残酷で凄惨なものだろう。……この世界では人を傷つけるという事は、すなわち人を殺すということに他ならない。そうでもしなければ逆に傷つけられ、殺されるのはこちら側なのだから。そんな場所に平和ボケした人間が、しかもゲーム感覚で飛び込めば、どうなるかなんて火を見るよりも明らかだ。一瞬で殺されるだろう。……そうなりたくなければ、攻撃など捨て置いて、できうる限り逃げるほかない。

つまりはそういうことなんだろう。本人はそんなこと一言も言っていないかったが。

「……ありえん。ファンタジー？ 現実よりも現実的シブイアじゃないか」

洩れ出るため息が止められない。

いくら死なない、必ず一年で帰れるとは言え、めんどくさすぎる。

しかも、そのめんどくさい世界に呼ばれた理由が……

とある恋人たち（予定）の仲を取り持つ手伝いをするこゝと、とか。

笑うしかない……いや逆か、笑えない。

何故わざわざ俺を……異世界から人を呼び出して手伝いをさせるのか。

この世界の人間では駄目な理由でもあるのか。

神が介入して仲を取り持つ恋人たちの存在は何を意味する？

そもそも女神シャルスの言う神とは何者だ？

……結局、詳しいことは何一つ教えてもらってないし。

今までの短い間で考察する限り、女神は必要最低限のことしか喋らない質たちのようだ。それが天然のものなのか、それとも意図してのものなのかはわからないが、過程をすっ飛ばして結果だけしか話さない。どうもそれがシャリスの基本スタンスであることに間違いはなさそうだった。

だから、余計にわからない。

その理由も、目的も。感知的に嘘はついていないようだが肝心なことともしゃべっていないようにみえる。

だから、きつと裏に何かある。

それが何かはわからないけど、呼び出した理由が月下老人のためだけ……ということは絶対ない、はず。

えー……朝っぱらからごちゃごちゃぶつぶつと何を考えてるのか
と言えは……つまるどころ『このまま黙って女神を信用していてもいいものかどうか。それが問題』なんだなあと思っただけのことなんだけれど。いかんせん情報量が絶対的に不足しているのでなんと

も仕様がなない。それに信用しようがしまいが結果はさほど変わらな
いという気もしないこともないわけ。その上、この状
況を独力で何とかできるほどの力を持つているわけでもなし、女神
の指す流れに乗るほかないというオチは確定しているから……あれ
？ つまり、これってただの愚痴？

とまあ、現段階の情報量で考察できるのはこの程度だろうと見切
りをつけて、借りていた寝巻からぬのふくに着替えてから部屋を
出る。少し時間は早いですが、居間の方から音がしているところを見る
と、まあ大丈夫だろう。

居間では女神がコーヒを片手に新聞らしきものを読んでいた。
部屋に入ってきたこちらをちらりとみてシャリスはつぶやく。

「かみたか守鷹か、はやいな」

その視線はすぐに新聞に戻された。
頬をかきながら、それに応える。

「あー、なんか目が覚めた」

「そうか、とシヤリスはつぶやくだけで新聞から目を離すことはない。
い。」

特に何も考えずてきとーに応えたはいいが、なんか、あれだな。

「熟年夫婦の朝」とでも題せそうなり取りだな。定年して暇をもてあまし気味の夫と、今まであまり家にいなかった夫に戸惑う妻とか、下手したら熟年離婚一歩手前な感じが

……ではなく、居間に来たはいいが、どうすればいいかわからない。勝手にテーブルについてもいいものだろうか？ こんなことなら、昨日の晩に朝食について聞いておくんだったと後悔する。

「あれ、守鷹かい？ ずいぶん早いね」

ルディオラさんが片眉（というか眉はないからどちらかと言えば、まぶたそのもの）をあげながら部屋に入ってきた。その手には朝食をのせていると思われる皿がある。

「あんたの分の朝食もすぐ用意するからそんなところに突っ立ってないで、どっか好きなところにも座って待ってな」

戸惑っているのを察したのか、こちらが反応するよりも先にルディオラさんはそう言うと言った。シャリスに皿を渡した後、すぐに部屋から出ていく。なんて言うかせわしない。朝飯前そんなことが忙しいのは異世界共通のことなのかと思いつつ、ルディオラさんの言葉に倣って席にく。

そのままぼけーっとだらーっと座って待っていたら、しばらくしてシャリスが新聞を読み終わったのだらう、バサツと音をたてながらそれをとじ、いつぞやのようなその詐欺師っぽい真剣な目をこちらに向けてきた。そして、コーヒーを少し口に含んでから、ちょうどいい機会だからと言って話し始めた。

「今後の予定だ。朝食後、少年の準備ができ次第、ここを離れてノスマルーク王国ルイーガー辺境伯領に向かい、そこで目標と接触する」

「はあ………」

いきなり話し出したと思ったら、今後の予定。本当に必要なことしか話さないな。もうこれ、会話と言えるのか？

「その後、彼らとしばらく行動を共にしてその人となりを理解したのちに作戦を立案、実行することになる」

立案するの俺？ ……きつとそうなんだろうな。

しかし、本当にうまくいくかね？

俺、本気でこれまでの人生そういう浮ついた話と無縁だったんだけど。具体的に言つと恋愛という字を書こうとすると何故かいつも恋愛と書いてしまつぐらいに縁がないんだけど大丈夫か？

米屋 守鷹プロデューズ！ らぶらぶバカップル大作戦！！

……ああ、名前からして駄目そうだな。

シャリスが再びコーヒーカップに口をつける。

……いや、あれがコーヒーかどうかは知らないが。黒いしたぶんそうだろう。

「この際、一つ注意しなければならぬことがある。まあ、簡単に予想はつくと思うが……彼らにこの計画がばれてしまうこと、これだけは絶対に避けねばならない。たとえば本人たちの気持ちは正しく向き合っているとしても、そこに女神の介入があったと知れば、決してよい気持ちにはならんだろうからな」

今回は女神の気遣いであってお節介ではないからな、とシャリスは言う。

「……それに付け加えるならノナは ノナロスファイア 創造神の使い魔は怒ると尋常じゃないくらい怖いしな。ばれたら、どうなることやら……」

やることは普通だし、それを話さない理由もすぐよく分かった……が、女神に恐れられるほど怖い魔女？ どんなんだ。

その疑問が顔に出たのだろうか。シャリスは一瞬顔をしかめた。

「少し前に、一年前に魔王が倒されたと言ったな？」

「……聞いた覚えがあるような」

「それをしたのがな……ノナなんだ。一片の容赦もなしに最上級魔法でタコ殴りにして 確かちよつとプチつときちやいまして軽く283コンボとか何とか言ってたな 魔王に正気を取り戻させ改心させて、事件を鮮やかに解決したんだ。……ああ、言っておくが、最上級魔法はそれだけで街一つを消し飛ばせるぐらいの広域殲滅の効果があるからな。明らかなオーバーキルだから」

戦いが終わった後には諸島が2、3つ消えてたつけ、普段は穏やかでいい子なんだが……などと言いつつシャリスはまたコーヒースする。さつきから何度もカップに口はつけているものあまり飲んでるようには見えないところを見ると猫舌なのか？

「……283？ それに諸島って……もしかしてその子を怒らしたら、欠片どころか灰すら残さず消し飛ばされるなんてこと」

「十分にあり得るぞ？ しかも、お前はあれだ。広い意味で死なないからな……きっと手加減なく本気で消し飛ばされるだろうな」

そうなりたくなかったら、ノナの逆鱗にだけは触れんことだ、とシャリスはカップを両手でもてあそびながら付け加えた。そして再度コーヒーを飲もうとして、あつっと言ってシャリスは反射的に顔をしかめてカップから口を離した。ほんとに猫舌らしい。

……まあ、ばれなきゃいいだけの話だろ。

これはその時になって気づいたのだが、シャリスは先に運ばれてきていたにもかかわらず俺の朝食ができるのをわざわざ待ち、俺が食べ始めるのに合わせて食べ始めた。優しいのか、優しくないので、それとも別の何かなのはよく分からない。

ルディオラさんの作った朝食を食べた後は、特に用意することも

なかったのですぐに出発するという話になった。ミトだけ？ お金を持っていくわけでもないで、RPGのように武器屋に行って武防具を揃えることもできないし、薬草を買うこともできない。それにどこかの勇者みたいにひとんち荒らしまわるわけにもいかないから、当然と言えば当然の話だ。装備的にはせめて旅人が着るような服がほしいところだが。

出立の時になって、結局ここにいる間中ずっとルディオラさんやシャリスとばかり話していて、村の人たちとはあまり話していなかったことに気がついた。それにも拘らず、多くの人たちが見送りに来てくれるあたり、暖かいのか、ただ単に祭り好きだけなのか、それとも村長に頭が上がらないだけなのか。どちらにしろもっと交流をもっておけばよかったと思う。

「ルディオラさん。いろいろとありがとうございました」

「こつちも仕事……じゃないけど、似たようなもんだから気にしなさんな」

そう言っつてルディオラさんはいつぞやのように歯（牙？）をだして笑う。が、その笑みをすぐ苦笑にかえた。

「私としてはもっとゆっくりしていつてほしかったんだけどね。まあ今回は仕方ないね。暇になったら茶でも飲みに来な。いつでも歓迎するよ」

「そんな時はぜひ魔法のレッスンなしでお願いします」

ルディオラさんは一瞬きよとんとした後、ああいいよと笑いながらうなづいた。

この人はほんと常識人、いや良識人だな。シャリスとは比べ物にならない。

「シャリスもいつも大変だろうとは思っけど元気でね」

「ああ、グアルディオラも息災で。……次に来る時は異国の酒でも持ってこよう」

「ああ、頼むよ」

そう言って二人は笑いながら挨拶を交わした。

人間万事塞翁が馬の耳に念仏。

この世はどうにもこうにもなりやしないことだらけ。

人生の中では、そういった煮ても焼いても食えない物をどううまくすり抜けていくか、これが一番重要なことだろう。その点ではネガティブになって後手にまわるよりも、ポジティブになって先手をうった方がいろいろと修正も効きやすいはずだ。主にシューティングゲームとかがそうだしな。

ってことで、ここはひとつとりあえずはキューピッド役を頑張ることにいたしましょうか。

帰還の日まで後364日。

拉致同然に連れてこられたこの見知らぬ世界で未だ何を求められているのかもわからないけれど、とりあえず絶対に一年で帰してくれるって言うんだから、その女神のお節介、じゃないや……気遣いつてののお手伝いに尽力しようか、と気合を入れる。

……あー、そう言えばこの仕事、報酬とか出たりするんかね？

そついう抜け目なさも人生の中では結構重要なことだね。

6・起点と次善の神さま（後書き）

二ヶ月も更新できませんでした。申し訳ないです。

ちよっと忙しかったのもありますが、それ以上に書けなかったです。結構早くに書く設定の内容も、村を出発するところまでを書くということも決めていたのですが、どうしても思う形にならなくて、ずるずるとしてました。

今回の裏のテーマは「シャリスを理解しようと努力しているような気がする」です。何故か分かりませんが、軽いノリがどっかに吹っ飛んでしまったような気がしてならないんですが、どうしても外せませんでした。今回の話までが一応プロローグみたいなもので次回からが本編と言う感じになります。

さて、今回の無駄設定ですが……

なんか長くなりそうなので、次のページ丸ごと使ってみます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7197j/>

次善の神さま

2010年10月17日20時42分発行